



1990年代以降の中国雲南省麗江における納西族東巴文字の変容

高, 茜

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2004-09-30

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲3210

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003210>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 183 】

氏 名・(本 籍) 高 茜 (中国)

博士の専攻分野の名称 博士 (学術)

学 位 記 番 号 博い第519号

学位授与の 要 件 学位規則第5条第1項該当

学位授与の 日 付 平成16年9月30日

【 学位論文題目 】

1990年代以降の中国雲南省麗江における
納西族東巴文字の変容

審 査 委 員

主 査	教 授	中山	修一
	教 授	岩井	正浩
	教 授	小高	直樹
	教 授	魚住	和晃
	教 授	浅野	慎一

論文内容の要旨

氏 名 高 茜
 専 攻 コミュニケーション科学専攻
 指導教官氏名 中山修一 教授

論文題目

1990 年代以降の中国雲南省麗江における納西族東巴文字の変容

論文要旨

1. 研究課題

研究対象である東巴文字とは、納西族の伝統宗教の東巴教において宗教儀式を記録するため、東巴祭司に用いられ、東巴経典に記載された象形文字である。研究の対象区域は、中国の納西族が最も居住している雲南省の麗江に設定した。この地域は、観光業を軸として経済発展を果している少数民族地区として、中国全土から注目を浴びており、東巴文字は、文化的なイメージとして、中心的な役割を果している。

東巴文字は本来、宗教祭司しか用いないものであり、一般の納西族の共有する文字ではなかった。だが、1990 年代以降の観光業の発展にしたがって、東巴文字が麗江の納西族のイメージとしてあつかわれ、観光経済が麗江社会への全面展開することと共に、東巴文字が麗江納西族の日常生活に現われるものとして、重要な存在となっている。

東巴文字についての研究は、19 世紀の末ごろからすでに開始されていたが、人類学と言語学の分野を中心に行なわれており、そのほとんどの関心は、文字の伝統的な意味や経典の解釈、さらには宗教文化とのかかわりなどに向けられていた。歴史上、麗江の社会は大きく変化した、宗教に対する人々の考え方も紆余曲折を繰り返したうえ、東巴文字に宗教文化の一部を構成する東巴文字にも大きな変化がもたらされることになった。さらにこの 10 数年間における麗江の観光都市化によって、東巴文字は新たな役割が期待され、その使用

法や造形においてすら変化がみられるようになった。しかし、その現代的な変容過程については、これまでほとんど研究の対象とされおらず、研究上の盲点となっている。そこで筆者は、東巴文字をデザイン史的な観点から捉え直し、近年の文化変容の実態を明らかにしようと考えた。本研究では、東巴文字の変容過程を政治的、経済的、社会的文脈からできるかぎり明らかにした。さらに近年の東巴文字をめぐる社会的な保護や伝承活動を含め、東巴文字の「再発見」によってもたらされた、納西族の新たなアイデンティティーについても検討の対象とした。

2. 研究の視点

研究を進めるにあたって設定した視点は、以下の 3 点である。

第 1 の視点は、東巴文字と納西族のかかわりについてである。現在の東巴文字の状況を考察し、なぜ東巴文字が納西族の人々のあいだで用いられることが少ないのかを理解するためには、大量な東巴文化、麗江地域、納西族、雲南各少数民族に関する研究を踏まえる必要がある。特に中国建国後の東巴文字の歴史については、政治的な要因から十分に行なわれてこなかったため、多くの現地研究者や、納西族の人々との会談によってこの問題の解明につとめた。ここで、東巴文字と深いつながりを有する東巴教と納西族とのかかわりを検討し、東巴文字が麗江納西族の社会生活にどのような役割を果たしてきたのか、さらに現代それがどのように変化してきたのか、つまり、東巴文字の消長という点について歴史的に考察した。

第 2 の視点は、観光産業における東巴文字の登場とその姿の変容についてである。東巴文字の土産品は、1980 年代に政府接待用として初めて作成され、1990 年代後半には、大量に生産、販売されるようになり、地域における最も重要な産業のひとつとなっている。これらの過程については現地の各部門の方々から提供された情報や資料およびインタビューだけでなく、さらに政府の文献資料や政策資料、新聞・雑誌などの現地でしか手に入れない第一資料を用いて、伝統的な東巴文字が現在の東巴文字土産品までたどりついた過程を明らかにした。また現在の古城に現われた東巴文字について、古城での存在状況や図案としての造形的特性、土産品の製作過程などについて現地での調査をもとに考察した。さらには言語学および文字研究の専門家の協力を得て、文字としての信憑性について考察し、土産品に書かれた東巴文字の姿について分析を行った。一連の考察によって、伝統における東巴文字と比較しつつ、東巴文字自体の変容を明らかにすることができ

た。また、麗江の中心である新華街における事例を通じて、東巴文字の利用がいかなる摩擦や民族的不均衡を生じさせているのかについても論じた。

第 3 点は、東巴文字と麗江納西族のアイデンティティーについてである。一般的にいつて観光記念品は、つくり手にとっては、自らの文化遺産の表出と伝達場として、また一方で他者（ここでは観光客）のそれらに向ける期待と眼差しを受容する場として立ち現われるものである。しかし麗江の土産品の場合、そもそも納西族の人々にとって東巴文字が根源的なアイデンティティーの拠り所とはなりえないような歴史的な問題が横たわっている。また、現在その利用において各地域からやってきたさまざまな民族がいることで、一般的な土産品と民族のアイデンティティーの関係とは異なり、麗江の現実に沿った客観的考察が必要である。さらに納西族の人々と東巴文字とのつながりを深めようとする政府のイメージ戦略が一方で進められており、そのことがより一層状況を複雑にしている。東巴文字をめぐるのは、さまざまな保護、継承、教育、広報など活動が行なわれてきた。筆者はそれらの活動実態を把握するため、活動にかかわる主催側の人々との会談や、学校見学、文化参観、研究所・博物館・教育局・民間の伝承団体等への訪問などを行ってきた。さらに東巴文字教育用教科書や伝承計画書などをはじめとする、文化保護や広報活動にかかわる多くの第一次資料を入手し、その実態を描き出そうと試みた。

3. 研究方法

先にも述べたように、現在の東巴文字が置かれている状況を、できるだけ正確かつ詳細に明らかにするため、第一次資料の発掘に力を入れ、そのための現地調査を精力的に行なった。1996 年において、筆者はすでに半年間、麗江での生活を行っていた。また 1997 年にも 1 週間という短期間ではあるが、麗江の視察を行っていた。2000 年から本格的に本研究に取り組みはじめ、2001 年から 2003 年の間に計 4 回、のべ 8 箇月間にわたる現地調査を行った。現地調査については、目的ごとに以下の 3 つ点からまとめておきたい。

第 1 には、麗江における政治的、文化的、経済的な動向について調査を行った。雲南省社会科学院東巴文化研究所をはじめ、麗江東巴文化博物館、麗江県誌所、麗江教育局、麗江市古城区委宣传部などの麗江現地機関および昆明の雲南師範大学、雲南省社会科学院への訪問を重ね、麗江の地方政策に関する資料や、東巴文化管理に関する資料、文化保護に関する資料、近年の重大な会議に配布された多くな貴重な資料を数多く入手し、各機関で数十名の人々に筆者の研究とかかわる多数の会談や、インタビューを行なった。これらの

訪問やインタビューを通じて、現在の政策の実質や方向性について把握することが可能となった。

第 2 には、文化保護活動や学校教育活動の視察を行った。まず雲南省社会科学院東巴文化研究所の東巴養成班を訪れ、一週間の見学を行なった。教師の研究者たちや 1 名の老東巴、さらには 8 名の東巴傳人の学生からも聞き取り調査を行い、学生の日常生活、授業、東巴技能展示などを現場で観察することができた。麗江納西東巴文化学校で行われている東巴文化伝承班の授業も参観した。また、麗江興仁小学校に 29 名の 6 年生の納西語授業や、麗江黄山小学校における小学校 5 年生 31 名に対する東巴文字授業の現場を見学し、先生や子どもたちにインタビューを行なうことができた。さらに、民間文化保護団体の麗江東巴文化伝習院を訪問し、院長へのインタビューも施した。その過程において、インタビュー資料や各学校の授業日程表、学生の学力統計、授業計画、教科書などの予想以上の資料を収集することができた。

第 3 には、土産品市場における東巴文字の使用状況について、現地調査を行った。麗江の土産品の市場である古城の民宿に滞在し、長期間にわたって、土産品市場の実態、東巴文字の運用範囲や、造形や製作などについて詳細な調査を実施した。特に、古城の新華街においては、3 箇月の民宿生活に伴い、そこで営業を行っている 156 店について、もれなく観察し、情報収集に努めた。多くの経営者と長期間にわたって接触することにより、数量的なデータからは推し量ることのできない、現実に迫ることができたと考えている。とりわけ、東巴文字の利用にかかわる表層的・言語的な問題についての考察および分析には、2 人の東巴文字研究者と 1 人の若い東巴の協力によって、より正確な分析が可能となった。

4. 論文構成

本論文は序章と結論を含め全 7 章構成としている。

序章においては、筆者の問題関心、研究の主題と研究方法および先行研究の検討を行なった。さらに研究動機や研究の独自性についても触れ、さらに論文全体の構成についても概観した。

第 1 章では、麗江の納西族と東巴文化について論じた。まず東巴文字とかかわる麗江県および納西族さらには東巴教とその祭司である東巴、東巴經典、東巴文字について概観した。次に 1990 年代までの東巴文字を歴史的に論述を通して、その消長過程を明らかにした。

第 2 章では、1990 年代半ば以降の麗江の観光政策と東巴文字のかかわりを中心に検討

した。まず、中国の改革・開放政策のもとに発展してきた雲南省の観光業の実態および麗江における観光経済への政策転換の過程を明らかにした。次に、観光政策の全面的な展開と、それに伴う東巴文化産業の形成について歴史的に考察した。最後にその東巴文字産業の発展において、いち早く東巴文字土産市場が古城で形成された経緯を明らかにした。

第 3 章では、麗江古城における東巴文字の光景および土産品製作状況を概観し、そこに現われた東巴文字の姿を明らかにした。まず、その調査における対象としてまず挙げられるのは、政府が進める道路標識や民間業者が設置した看板や販売されている東巴文字土産品である。つぎに、調査を行なった店舗について、その経営内容別に分類し、それぞれの製品の製作過程を概観することにした。

第 4 章では、第 3 章における分析をもとに、古城・新華街の東巴文字土産品文化にかかわる問題およびその実態について考察した。まず、土産品に書かれた東巴文字の文字としての使用に具体的な問題を明らかにし、それぞれの土産品の販売者について考察を通して、外来民族と麗江納西族のあいだに現われる問題が顕在していることを明らかにした。さらに、このような現象や問題に対する政府側の施策や態度などを考察した。

第 5 章では、東巴文字にかかわる、文化保護および継承活動など麗江納西族の新たなアイデンティティーの形成を促す活動について論じた。まず、現地で実施した伝承活動について記述し、その意義について考察した。次に、麗江の小中学校で実施された東巴文字の普及活動について、その目的や方法などを記述した。最後に麗江社会における東巴文化の宣伝活動やイベント、および東巴文字のイメージを高めた「世界記憶遺産」への申請などにも注目し、今後の東巴文字が納西族の人々に与える影響について論じた。

結論では、本研究を通して明らかにしたことを 5 つのテーマごとに論文全体のまとめを行った。さらに、残された課題について、今後の展望を述べた。

論文審査の結果の要旨

氏 名	高 茜 (ガオ・チエン)		
論文題目	1990 年代以降の中国雲南省麗江における納西族東巴文字の変容		
判 定	合 格 ・ 不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教 授	中 山 修 一
	副 査	教 授	岩 井 正 浩
	副 査	教 授	小 高 直 樹
	副 査	教 授	魚 住 和 晃
	副 査	教 授	浅 野 慎 一
要 旨			
本論文は、全体として、222 頁 (1 頁、40 字×30 行) の分量をもち、「序章」および最終章に相当する「結論」を含む、次の 7 つの章によって構成されている。 序章 第 1 章 麗江の納西族と東巴文字 第 2 章 1990 年代半ば以降の麗江の観光政策と新たな市場の出現 第 3 章 古城に出現した東巴文字の実態 第 4 章 古城・新華街における土産品文化に関する諸問題 第 5 章 東巴文化の保護と継承をめぐる 結論 この論文は、雲南省麗江地区に居住する少数民族である納西族に伝わる東巴教の經典において祭司である東巴によって伝承されてきた象形文字である東巴文字が、1990 年代以降、いかに変容したかにかかわって、その様相の一端を政治的、経済的、教育的文脈から明らかにすることを目的とするものである。 本論文の内容上の特徴とあわせて評価すべき点を整理すれば、おおよそ以下の 5 点にまとめることができる。 第 1 に、誰によって、いつ、いかなる目的で書かれた文字なのかという、東巴文字の文字としての特徴が概観されたうえで、発見期としての建国以前、絶滅期としての建国から文化大革命期まで、再発見期としての改革・開放以降の 3 期に分け、この文字の消長過程が、現地で渉猟された文献資料に基づき、主に政治的文脈から詳細に跡付けられている点。 第 2 に、改革・開放以降の麗江地区の観光政策がどのように進められ、それに伴い、宗教文字としてすでに消滅しかけていた東巴文字が、いかにして観光産業という経済的行為のなかへその存在の場を移行したかについて、その実相が、現地研究機関の協力を得て、			

周到な調査によって手際よく実証されている点。

第3に、標識、看板、土産品のなかに新たに東巴文字が登場することによって派生してきた社会的文化的諸問題、たとえば描かれている文字の異形化と信憑性にかかわる問題、経営者としての他省民族の麗江地区への流入と現地納西族との関係、それらの問題に対する政府の対応などが、長期にわたる現地調査に基づき十全に分析されている点。

第4に、麗江地区の世界文化遺産への登録と東巴文字の世界記憶遺産への登録を機に、必ずしも一般の納西族全員が共有してきたとはいえない東巴文化を、とりわけ東巴文字を納西族の象徴物としてみなし、それを利用して民族のアイデンティティの再構築へ向かわせようとする政府によって展開されはじめた民族教育の実情が、現地で入手された資料と関係者へのインタビューによって再構成され、多様な視点から考察されている点。

第5に、上記4点の分析と考察から、結論として、東巴文字の使用空間が祭儀から商店へ、描かれる場が経典から土産品へ、描き手が東巴から商売人へ、利用者が東巴教徒から観光客へ、描かれる内容が聖なる宗教的内容から多様な世俗的内容へと、1990年代をとおして東巴文字に根底的な変容が起こったことにより、これまで納西族が受容してきた漢文化によって形成された麗江地区の物質・視覚世界の一部が自民族文化の表現形式へと徐々に塗り替えられていく複雑な今日の実態の一端が明らかにされた点。

以上の諸点に鑑み、本研究は、改革・開放政策が中国少数民族の社会と文化にどのような影響を及ぼしたのかを視野に入れた、文献資料による詳細な分析と現地における綿密な実態調査に基づく、デザイン史および物質・視覚文化研究の立場からの、麗江納西族の東巴文字を対象とした実証的事例研究として高く評価できる。また、この研究成果は、今後伝統文化の商業的利用の問題や、経済発展やグローバル化に伴う民族固有のアイデンティティの喪失と再構築化の問題等を論じるに際しての、ひとつの有効な手がかりを提供するものである。その一方で、東巴文字解読にとつての必須の要件としての納西語の素養が申請者に十分に備わっていなかったことに起因する文字分析の限界性や、観光学や世界遺産研究といった隣接する他研究分野に対しての申請者の関心の薄さが認められたことも指摘しておかなければならない。これらについては、今後の課題として取り組んでほしい。

なお、本論文とあわせて、以下の既発表論文が参考論文として申請者から提出されたので、これらの論文を審査の参考としたことを付記する。

- (1) 高茜「改革・開放以降の中国迪慶チベット自治州維西リス族自治県同楽村におけるリス族の日常生活品とその変容」『表現文化研究』第2巻第2号、神戸大学表現文化研究会、2003年3月、pp. 87-105。
- (2) 高茜「中国麗江県ナシ族のトンパ文字の今日の変容——商業的利用と保護政策のはざま」『表現文化研究』第3巻第1号、神戸大学表現文化研究会、2003年11月、pp. 1-19。
- (3) 高茜「1990年代以降の中国雲南省麗江における納西族東巴文字の政治的経済的変容」『デザイン史学』第2号、デザイン史学研究会、2004年7月、pp. 13-44。

以上の審査結果から、本審査委員会は、学位申請者の高茜（ガオ・チエン）によって提出された本論文が、博士（学術）の学位を授与するに値するものと判定した。